論文

宮内庁蔵『万国絵図屏風』人物図考

李　暁璐
王　尊龍　訳

キーワード
大航海時代　南蛮屏風　西洋製地図　人物図　モチーフの出典

はじめに

一五世紀中葉、ユーラシア大陸東西を結ぶ貿易路が、コンスタンティノープルを陥落させたオスマン帝国により支配された。それを受けてイベリア半島に位置するスペインとポルトガルをはじめ、ヨーロッパ諸国は新航路の開拓に取り組み始め、航海事業を積極的に後援していた。一五四三年、火縄銃を携えるポルトガル人が明人・王直の船に乗り込んで種子島に到来、一五四九年、ポルトガルイエズス会のフランシスコ・ザビエル San Francisco Xavier（一五〇六～一五二二）が鹿児島に上陸した。こうして、大航海時代のうねりのなかで、黄金の国を探し求めるヨーロッパの人々は初めて日本と邂逅したのである。

一五八三年、イエズス会の宣教活動を進めるために、イタリア出身の画家ジョバンニ・ニコラオ Giovanni Nicolao（一五六〇～一六二六）も日本に派遣された。その後、彼は長崎、有馬、安土など各地のセミナリヨ（小神学校）を遍歴し、日本人生徒に洋画、銅版画の技法を伝授

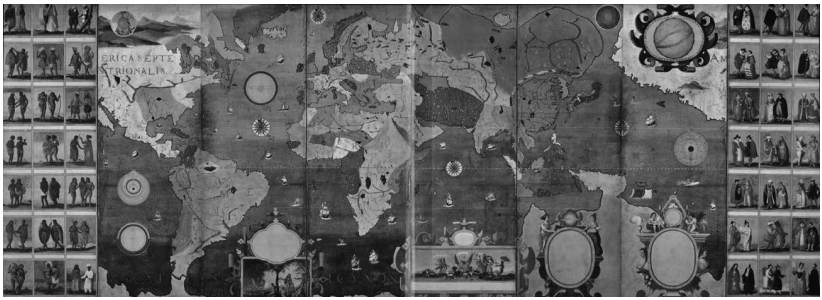


図１『万国絵図屏風』宮内庁三ノ丸尚蔵館所蔵

していた。後にイエズス教画派と呼ばれる、こうしたニコラオの指導を受けていた生徒たちの代表的な作品として、『万国絵図屏風』（宮内庁三の丸尚蔵館蔵、図１）、『レパント戦闘図・世界地図屏風』（香雪美術館蔵）、『四都図・世界図屏風』（神戸市立博物館蔵）などが挙げられる（便宜的に以下「宮内庁本」、「香雪本」、「神戸本」と記載）。

本稿で検討の対象とする宮内庁本は、紙本金地着色、八曲一双の屏風であり、各隻は縦一七八・六センチメートル、横四六八・三センチメートルとなっている。製作時代は一六一〇～一六一四年[1]であると推定される本作は、西洋絵画の技法が用いられており、初期洋風画の傑作とも称されている。左隻には、上部に王侯図八枚、下部にポルトガル地図とその他都市図二八枚があり、右隻に四扇の世界地図屏風が中央に置かれ、その左右に各国または民族の様相を描く、計四二枚の人物図がブロック状に並んでいる。これらの人物図において、男女一人ずつが一組に描かれるものがほとんどであるが、三人に一組となっているものも一枚ある。しかし、「万国」というものの、描かれたのは具体的にどの地域のどの民族なのかに関しては、いずれも図面上に明記されていない。

ところで、こうした宮内庁本の原拠となる作品については、既に先行研究によって明らかにされている。ギュンター・シルダー Günter Schilder 氏は、本図の製作形式や周辺装飾物を考察し、その原本となる作品をP・カエリウス一六〇九年版世界地図と判定した[2]。三好唯義氏[3]と勝盛典子氏[4]は、上記シルダー氏の結論を援用し、W・ブラウ一六〇六／〇七年版世界地図の改訂版であるP・カエリウス一六〇九年版世界地図は、先述した三つの世界図屏風の原拠であることを再確認した上で、これらの地図における日本およびその周辺地区の描写は、製造当時の最新情報に基づいて作成されたものであると述べている。

要するに、この一連の日本製地図屏風は、P・カエリウス Peter Kaerius が一六〇九年に製作した壁掛け世界地図から派生したものであると考えられている。しかし、残念ながら、従来の研究では屏風の地図部分だけに焦点を当てるものがほとんどである。それ以外に、王侯図や都市図に触れた論考は僅かながら存在するものの、屏風の左右に描かれる人物図に関しては、まだ十分な考察が行われておらず、資料紹介の段階にとどまっている。また、多くの先行研究は、人物図部分を地図部分と同一視する傾向があり、性質の異なる両部分はすべて、P・カエリウス一六〇九年版世界地図、ひいては広義のオランダ製地図を典拠とするものであると、一概に判定されている。その結果、日欧各版本の間に存在する人物図区画の量的な差異が看過され[5]、日本製屏風は前述二種類のオランダ製地図のほかに、何を基に描かれたのかなど、多くの疑問が未解決のままである。

このような現象については、すでに清水義明氏や三好唯義氏が注目している。清水氏の研究によると、W・ブラウ一六〇六／〇七年版世界地図では人物図の数は三〇区画しかないが、一六一九～一六四五年の間に出版された別のブラウ作地図においては四二区画の男女人物図が確認されたという。しかし、前述した通り、宮内庁本は一六一〇～一六一四年に製作されたものであるため、出版時期のより遅いブラウ作地図の影響を受けているとは言い難いが、両者の典拠は相似しているものであった可能性も否めないだろう。

三好氏は、宮内庁とP・カエリウス一六〇九年版世界地図の人物図と比較し、後者は前者にとって絶対必要条件ではあるが十分条件ではないと述べている[6]。〈表1〉で示しているように、宮内庁本の四二区画の人物図の内、二五区画はオランダ製原本から採用されたものであることが判明したが、それ以外の一七区画は別の資料に因っており、一三区画のモデルが特定されていない。本稿は基本的に三好氏の指摘に同意するが、いくつかの点についてはまだ検討の余地があると思われる。例えば、〈表1〉にある「イスパニア」とされる人物図は、香雪本ならびに神戸本のそれと一致しているが、P・カエリウス一六〇九年版世界地図のスペイン人物図とは明らかに表現上の差異が存在する。また、左扇の「北極付近に並ぶ人物」と名付けられている人物図に関して、具体的にどの地域の人物を指しているかについては、三好氏は明確に示していない。そのほか、「日本」と「中国」人物図はP・カエリウス一六〇九年版世界地図と違う描き方をしていることや、この時期の西洋製地図にない「朝鮮」人物図が追加されていることから、宮内庁本には、日本人絵師自身の知識や経験に基づいて制

〔向かって左端の一扇〕			〔中の六扇〕	〔向かって右端の一扇〕		
	[27]ﾊﾟﾝﾀﾞ・ﾓﾙｯｶ	[22]ｸﾞﾘｰﾝﾗﾝﾄﾞ（香）こるらんちゃ	世界地図		[2] ｲｽﾊﾟﾆｱ（香）いすはにや（神）	[3] ｲﾀﾘｱ（香）ろうま（神）
[25]ﾏｶﾞﾗﾆｶ（香）まからにか		北極付近に並ぶ人物		[11]ﾄﾞｲﾂ	[10]ﾌﾗﾝｽ（香）ふらんさ	
[19]ｷﾞﾆｱ（香）きねかる		[24]ﾁﾘ・ﾍﾟﾙｰ		[8] ﾄﾙｺ（香）つるこ（神）	[5] ﾊﾝｶﾞﾘｰ	[6] ﾓｽｸﾜ（香）もすかうひや
[30]ﾏﾗﾊﾞﾙ・ｶﾅﾘﾝ（香）まらはる	[30]ﾏﾗﾊﾞﾙ・ｶﾅﾘﾝ（香）かなりん	[28]ｼﾞｬﾜ		[9] ﾌﾘﾀﾆｱ	[1] ｱｲﾙﾗﾝﾄﾞ（香）いるらんです	[15]ｻﾓｰﾀﾙﾀﾘｱ（香）たるたありや
[21]ｶﾌﾘ		[23]ﾌﾞﾗｼﾞﾙ			[16]ﾍﾟﾙｼｬ・ｱﾙﾒﾆｱ	
	[20]ｺﾝｺﾞ			中国	[29]ｽﾏﾄﾗ（香）さまたら	
[26]ﾗﾌﾞﾛﾈｽ（香）ぬすひと島		[18]ｱﾋﾞｼﾆ（香）あびしん		日本	朝鮮	

（香）は香雪本世界地図屏風下辺にみられる人物図，（神）は神戸本四都図屏風の上辺にみられる人物を示す。
［No.］は模式図①に対応している。

〈表１〉宮内庁『万国絵図』地図・人物図（三好唯義「Ｐ．カエリウス 1609 年版世界地図をめぐって」より転載）

作された部分があることがわかる。

したがって、宮内庁本の四二区画の人物図において、一八区画の典拠ならびに一四区画のモデルは未だに特定されていないことが明らかである。そこで本稿では、各区画で描かれた人物のモデルと図像的源泉を考察した上で、それぞれ「中国」、「日本」、「朝鮮」を表していると思われてきた人物図に着目し、その表現内容を再検討する。この検討を通じて、日本で生まれた新たな「南蛮趣味」の人物図から、最初に西洋絵画の影響を受けていた絵師たちの知の様相が浮かび上がってくるだろう。

一　日本における西洋図像の借用と再創造

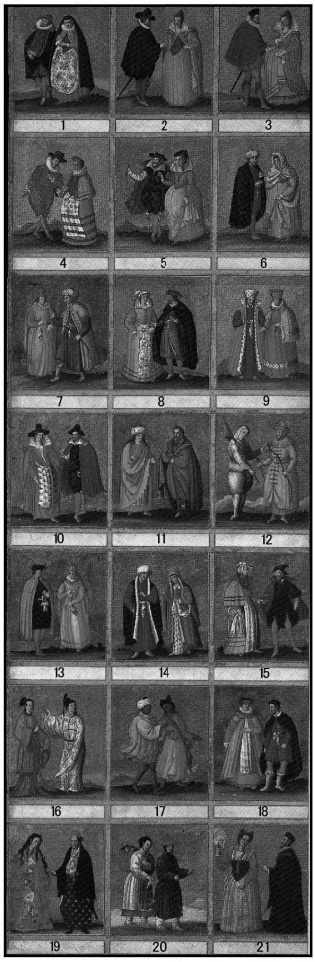
宮内庁本における典拠が特定されていない一八区画の人物図について、結論を先に述べると、その図像的源泉となる作品群は、(1)Ｐ・カエリウス一六〇九年版世界地図、(2)一七世紀にブラウ、カエリウス、そしてホンディウス Jodocus Hondius によって作成された地域地図・世界地図に現れた人物図、および当時の服飾書、都市図などその他の資料という二つの部類に分けることができる。

そこで、まずP・カエリウス一六〇九年版世界地図を典拠とした図像から考察を始めよう。

1. P・カエリウス一六〇九年版世界地図の借用と再創造

P・カエリウス一六〇九年版世界地図（以下、カエリウス地図）の周縁に描かれた装飾的部分は、宮内庁本における人物図の主な図像的源泉とみなされている。前述した通り、本地図の原本はすでに逸失しているが、W・ブラウ一六〇六／〇七年版世界地図（以下、ブラウ地図）に基づくものであることは、多くの先行研究によって確認されている。しかし残念ながら、もととなるブラウ地図でさえ、第二次世界大戦の時に焼失し、現存するのはアムステルダム国立美術館所蔵の写真版だけである。ところが、写真版は大型壁掛け地図である原作を九×一三センチメートル[2]に

右（R）



左（L）

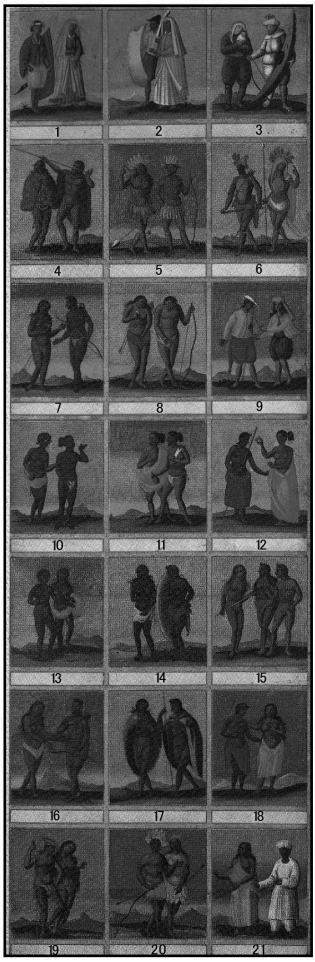


図２「HABITU CIVIUM ORBIS CAYRO（カイロ市民の服飾）」，W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図

凝縮しているため、人物図部分には不鮮明な輪郭しか認識できない。

こうした状況は、宮内庁本に関する研究にも支障を及ぼしているようである。例えば、カエリウス地図の下側に、「HABITU CIVIUM ORBIS CAYRO（カイロ市民の服飾）」と題する人物図がある（図2）。同じ図像はそのまま宮内庁本（R-6）にも用いられたものの、写真版がぼやけているためか、本図について従来の研究ではモデル、および典拠は不明とされていた。そのため本稿では後の分析で、ブラウ地図の写真版、ならびに画面がより鮮明で認識しやすい当該地図の模写版とされる作品をともに取り上げることで、カエリウス地図と宮内庁版人物図との関連性を説明していく。[8]

宮内庁本 R-6 と同じような状況は R-18 の識別においても見られる。同図の右側では、左手を体の前に置き、右手でマントを掴んでいる男性が、縁に毛皮がついた帽子、マントと同色の肩掛け、ベルトで締め付けられた服に身を包んでいる。彼の傍には、ふちに毛皮飾りのコート、短めの肩掛け、そして白い襞襟を着用している女性が立っている。このような姿の人物は、カエリウス地図に出現する「POLONI POLEN（ポーランド人）」（図3）と類似している。しかし、解像度の関係上、R-18 はポーランド人物図であるか否かの判断については、より慎重な確認が必要になる。その裏付けとして挙げられるのは、カエリウス地図、そしてブラウ地図と同じ図像源を持つクラース・ヤンス・フィッセル Claes Jansz Visscher 一六一四年版世界地図である。[9] 筆者は、当該地図にあるポーランド人物図（図4）を宮内庁本 R-18 と比較してみたところ、両者には相違点が存在するものの、いずれも同じ様式の服装をしており、特に女性の手の動きの描き方は共通している。それゆえ、R-18 はポーランド人を表す人物図区画であると推測される。

図３「POLONI POLEN（ポーランド人）」，W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図

図４「POLONI（ポーランド人）」，クラース・ヤンス・フィッセル一六一四年版世界地図

図5 「CAFRES ET INSULAE S. LAURENTII INCOLAE（カフレとS. ローレンティー島の住人）」，ホンディウス一六二四年版世界地図（W. ブラウー六〇五年版世界地図）

前述した二例は、原本たるカエリウス地図にある男女二人一組の人物図を基に、いささかの改変を加えて制作したものである。だが、原本の人物図はすべて一人の男性と一人の女性という組み合わせとは限らない。先行研究によると、宮内庁本のL-13に描かれている二人は、カエリウス地図の「CAFRES ET INSULAE S. LAURENTII INCOLAE（カフレとS・ローレンティー島の住人）」と題する図（図5）の左側にある二人に対応するという。そのため三好氏は、L-13は「カフレ島」を表すものであると判断している。一方で、L-13の右側に位置するL-14について、これまでモデル不明とされてきたが、図5の右側にいる二人（S・ローレンティー島の住人）と比較すると、後者の女性（右から二人目）が左右の人に遮られているため細部の表現は不明瞭であるものの、男性（右から一人目）の左肘を曲げる角度、特徴的な盾、そして腰布の結び方と余った布の垂れ方の描写は、宮内庁本L-14のそれと酷似している。そのため、L-14に描かれているのは、「S・ローレンティー島」を表す人物であると考えられる。

こうした複数の民族がまとめて描かれる西洋地図の人物図区画を分割し、一区画一民族のように再構築する手法は、宮内庁本において多く用いられている。しかし、参考となる図像は、必ずしも図5のように一区画の中で、異なる民族の男女がちょうど二人ずつ描かれているとは限らない。比率から言えば、最も多いのが三人一区画である。この場合は、図5の四人→①L-13の二人、②L-14の二人のように、民族ごとに均等に分けることができないため、屏風の絵師自身による「再創造」が必要となる。

例えば、宮内庁本のL-17には、マントを羽織る人物が描かれている。この服装上の特徴は、カエリウス地図の「PROMONTORII BONAE SPEI ET CONGO POPULI（喜望峰とコンゴの民）」（図6）の右側の一人にも見られる。おそらくL-17は、図6のマント姿の男性を手本にして、同じような服装の女性を付け加えたもの

図6 「PROMONTORII BONAE SPEI ET CONGO POPULI（喜望峰とコンゴの民）」，ホンディウス一六二四年版世界地図（W. ブラウー六〇五年版世界地図）

であろう。

一方で、同じ図6であるが、左側の長い腰布だけをまとっている半裸の男女は、モデル不明とされてきたL-18の二人とほぼ同様の姿態と服装をしている。もちろん、変更点として、女性の髪が短髪から長髪に変えられたという点が挙げられるが、これも屏風の絵師が図像を再創造するときによく使う技法なのである。なお、三好氏は、宮内庁本L-17の二人は「コンゴ」を表す人物であると述べている。そのため、L-18に描かれているのは、「喜望峰」の人物であると推定される。

このような再構築の技法が応用された例は他にもいくつか見出される。宮内庁本L-4は、カエリウス地図にある「MAGELLANICI FRETI ACCOLAE（マゼラン海峡の近くに住む人）」（図7）と題する人物図を典拠しているものであり、左側にいる二人の体勢と装束はほとんどそのまま写されている。この点については、すでに先行研究によって明らかになっている。一方で、図7の左端に描かれている人物に関しては、これまで指摘されたことはないが、実はこの図像は宮内庁本のL-20と対応している。L-20はこの男性の描写を継承した上で、女性図を追加したものであると考えられる。人物が羽根で作られた冠と下着を身につけている点や、弓を持っている男性が左上に頭を向けている姿から、両者の共通性が認められる。

図7「MAGELLANICI FRETI ACCOLAE（マゼラン海峡の近くに住む人）」，J. ブラウー六四五 / 四六年版世界地図

図8「FRETI MAGALLANICI ACCOLAE（マゼラン海峡の近くに住む人）」，W. ブラウー六〇八 / 二六年版アメリカ大陸地図

図9「ICONES PATAGONVM, ad Fretum Magall（マゼラン海峡の近くのパタゴニア人の画像）」，W. ブラウー六〇八 / 二六年版アメリカ大陸地図

また、モデルとなる人物の所属地域について、三好氏はL-4が「マガラニカ」を表す図像であると述べている。マガラニカMAGELLANICAとは、南極中心と想定された仮説上の大陸であり、イエズス会宣教師マテオリッチMatteo Ricciが制作した世界地図や、江戸時代の日本で出版された地図作品などにおいては、南極大陸に相当する部分に「墨瓦蝋泥加」という漢訳で記載されることが多い。しかし、図7のラテン語タイトル

を見ると、MAGELLANICI FRETI は単にマゼラン海峡を意味しており、マガラニカ MAGELLANICA とは異なる表現なのである。

では、同じく図7を原本とするL-4とL-20は、それぞれどの地域の人物を描くものであろうか。カエリウス地図より出版時期の早いW・ブラウ一六〇八／二八年版アメリカ大陸地図では、図7の三人組は二枚の独立した人物図として出現している（図8、図9）。双方の構図は図7と異なるものの、人物の体勢や衣装に関する基本的なモチーフは共通しており、タイトルにおいても共に「マゼラン海峡の近く」という文言が書かれている。こうした人物図の分割・合成の技法は、宮内庁本L-4、L-20の作成に用いられるものと同じ原理である。その中で、図7の左端の男性と対応する図9のタイトルは、「ICONES PATAGONVM, ad Fretum Magall（マゼラン海峡の近くのパタゴニア人の画像）」であり、パタゴニア地方の人というさらに詳細な情報が記されている。これによって、宮内庁本L-4とL-20はそれぞれ、マゼラン海峡の近くに住む人とパタゴニア地方の人を表すものであるということがわかる。

そのほか、トルコ人物図とみなされている宮内庁本のR-7について、そこに描かれている人の服装と姿勢から見れば、本図はカエリウス地図にある「ARABES ET TURCA（アラブ人とトルコ人）」（図10）の右側の男女二人を典拠して描かれたものであることがわかる。そして、残りの一人の「アラブ人」について、その服装上の特徴、例えば羽毛飾り付きの帽子、身につけている長いマントなどは、宮内庁本R-13の男性にも見られる。そして、宮内庁本R-13と

図10 「ARABES ET TURCA」（アラブ人とトルコ人），W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図

図11 「ARABES」（アラブ人），ホンディウス一六〇八年版世界地図

図12 「BANDAE ET MOLUCCARUM INCOLAE/ IAVANI」（バンダとモルッカの住人 / ジャワ人），W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図

R-7に現れる女性を比較すると、両者は鏡像のように左右の向きは違うものの、衣装と体勢の表現はほとんど一致している。これはおそらく、屏風の絵師が三人しか描かれていない図10を二つの区画に再構築するとき、同じ女性図を二箇所に適用した結果であると考えられる。男性が髭面から髭無しの容姿になったことや、女性のドレスの柄が変わったことなど、いささかの改変はなされたが、宮内庁本R-13とR-7はともに図10を原本としていることは間違いないだろう。それゆえ、R-13は「アラブ」を表すものである可能性が高い。この推論は、ホンディウス一六〇八年版世界地図にあるアラブ人物図（図11）からも裏付けられている。

このような「再創造」の手法、すなわち、三人一組の人物図を二人二組に描き換えることにあたり、原本の女性図を二次利用し、両方の男性図に付け加えるという手法は、カエリウス地図のなかにある「BANDAE ET MOLUCCARUM INCOLAE/IAVANI（バンダとモルッカの住人／ジャワ人）」（図12）という人物図にもある。この図像にある二人の男性は、それぞれ宮内庁本のL-1とL-2のなかの男性に対応している。それに対して右側の女性は、図6の例と同じ手法で再加工を施された上で、L-1とL-2に配置されたのである。この二つの図像のモデルについて、三好氏はL-2を「バンダとモルッカ諸島」と名付けたが、L-1については明確な意見を述べなかった。しかし、前文に挙げた例が示している通り、宮内庁本の人物図は、基本的に一区画一民族の形で構築されている。そのため、L-2はバンダ・モルッカ諸島両地域を表すものであるという判断について、疑問の余地があると思われる。

それでは、L-1とL-2は果たしてどこのどの民族を指しているのか。この問題を解決するにあたり、まず図12の三人が最初に登場する地図を探る必要がある。筆者の調査により、図12における人物のモチーフが載せられている現存最古の地図は、一六〇〇年にコルネリス・クラース・ファン・ウィーリンゲン Cornelis Claesz van Wieringen が出版した『第二次東インド諸島航海図（*Overview map with the route taken by the second Voyage [1598-1600] to the East Indies*）』であると判明した。この地図の右上の装飾的部分（図13）に、現在のインドネシアに属するテルナテ（Ternate）、バンダ（Banda）、そしてアンボイナ（Amboyna）の人物が描かれている。その中で、「バンダ島の軍人」（Milites insulae Bandae）を表す人物（上の右から二人目）は、宮内庁本L-1に描かれている男性と比べれば、体勢においては区別があるものの、服装上の特徴、例えば袖の広い上着、頭部を包む布帛、または武器として

図 13 「第二次東インド諸島航海図」*Overview map with the route taken by the second Voyage（1598-1600）to the East Indies*, 1600 年版（局部）

の盾と刃物はほぼ一致している。そして、三好氏に「バンダとモルッカ諸島」と名付けられた宮内庁本 L-1 にある男性について、その特徴的な帽子は、図13の中のバンダ人より、「AMBOYNA（アンボイナ）」を表す人物（下の右から一人目）と相似性が高いと考えられる。したがって、確かに宮内庁本 L-1 と L-2 の直接的な図像源はカエリウス地図（同ブラウ地図）であるが、この二つの図像が代表する地域について、「バンダ」と「アンボイナ」と認識するのがより的確なのではないだろうか。

上記のように、カエリウス地図の周縁に位置する装飾的部分から図像を借用することは、宮内庁本において最も多いパターンである。一方で、地図本体でもいくつかの人物画が点在している。これらの図像も、屏風の絵師に典拠とされていた。例えば、モデルが確認されていない宮内庁本 L-6 の人物について、カエリウス地図の上部に描かれている一列の人物（図14）の左端にある二人は、衣服ないし体勢の表現は、L-6 と高い類似性を有している。そのため、L-6 は図14の借用とみなすことは容易であろう。

次に注目されるのは、図14の左から三、四人目の表現である。新大陸の発見にともない、様々な旅行記における先住民に関する描写が地図製造者に採用されるようになり、アメリカ先住民の典型的なイメージとして、羽根で作られ

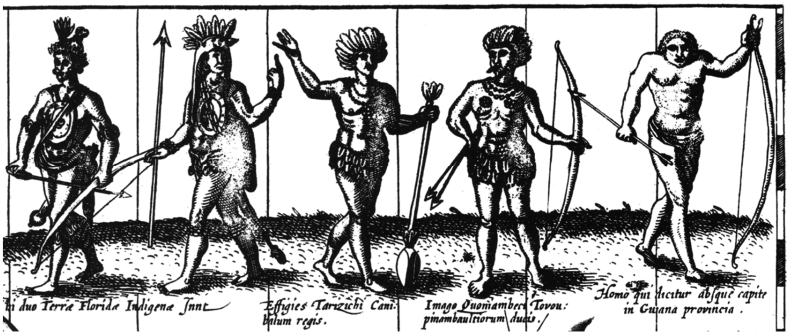


図14　P．カエリウス一六〇九年版世界地図（局部）

た冠と下着を身につけている姿も、この時期の地図作品に頻出していた。ともに羽根の冠と下着を着用しているこの二人は、一人は手を高く挙げており、もう一人は左手に弓、右手に矢を持ち合わせて、左の人に目を向けている。このような表現は、宮内庁本L-5の人物図とほぼ一致している。若干の相違点として、図14の左から三人目の頭部および、武具と思われる物を持つ手の描き方などが挙げられるが、これはおそらく、屏風の絵師が図14の左から二人目の体勢を繰り返し使用した結果だろう。

そして、図14の左から五人目に立つ片方の手で弓を持ち、もう片方の手で矢を持っている男性が描かれている。頸部にあたる部分がなく、頭部と胴体が直接つながっているこの男性は、同地図において他に類を見ない特異な存在と言えよう。ここで注目したいのは、宮内庁本L-8には、上記の男性と同じような特徴を持つ人物が描かれている。興味深いことに、カエリウス地図に出現する無頸人はこの男性しかいない。そのため、宮内庁本の絵師はL-8を描くにあたって、全体の統一感を意識しつつ、この男性図を参考して新たな女性図を創作し追加したのではないかと推測される。カエリウス地図に記されている説明文によると、図14の人物画は、左からフロリダ原住民（Florida Indigenae）、食人王（Canibalum regis）Tarizichi、トゥピナンバ部族（Tououpinambaultiorum）の統治者Quoniambec、ギアナ州（Guiana provincia）の無頸人を表している。これにより、宮内庁本の上記の図像と対応する諸区画のモデルも明らかになる。

最後に、宮内庁本R-12、R-14、L-9のモデルとなる民族と地域について検討しておきたい。一男一女の組み合わ

図15 「たるたありやの人」,『レパント戦闘図・世界地図屏風』

図16 「CHILENSES（チリ人）」,ホンディウス一六〇八年版世界地図

図17 「PERCICUS（ペルシア人）」,ホンディウス一六〇八年版世界地図

せで表現されているこれらの図像は、すべてカエリウス地図からその一部を継承されたものである。しかし、原本のタイトルはそれぞれ「SAMOIEDAE ET TARTARI（サモエード人とタタール人）」、「CHILENSES ET PERUIANI（チリ人とペルー人）」、「PERSAE ET ARMENII（ペルシア人とアルメニア人）」となっており、一区画の中で複数の民族が三人以上の形で描かれている。そのため、原本と対応する宮内庁本の区画は具体的にどの民族を指しているかはまだ不明である。そこで、筆者は同じく一区画一民族の図式を採用している香雪本（図15）とホンディウス一六〇八年世界地図（図16、17）を上記三区画と照合した。その結果、R-12、R-14、L-9はそれぞれタタール人、チリ人、ペルシア人を代表する人物図であることがわかる。

以上の分析から、カエリウス地図を参考にして、宮内庁本の人物図区画を制作した日本人絵師は、同地図の周縁部に位置付けられる装飾的な人物図だけでなく、本体部分に散見する人物画も借用の対象にしていたことがわかる。そして、ここにおいての借用は、単純な複製と異なり、一種の再創造なのである。こうした再創造を行う際に用いられていた手法として、主に(1)基本的に原本の表現をそのまま維持するが、細部の改変（髪の長短など）だけを行う、(2)三人組から一人を減らして男女二人一区画にする、(3)四人組を二つの区画に組み替える、(4)、三人組のなかの女性図を二次利用し、両方の男性図に付け加えることによって、二人二区画に再構築する、(5)地図本体に描かれている単体の人物画を基に、新しい画像を作成し、男女二人一区画の形で組み合わせる(ガイアナ無頸人、マゼラン海峡人の例)、以上五点が見受けられた。

2. 一七世紀に出版されたその他の地図、版画の借用と再創造

ここまで、宮内庁本の人物図区画におけるP・カエリウス一六〇九年版世界地図の借用と再創造について分析してきた。しかし一方で、宮内庁本の絵師が人物図区画を描くにあたって参考した資料は、上記カエリウス地図以外にも多数存在する。

まず挙げられるのは、一七世紀初頭にP・カエリウスによって出版された一連の地域地図である。前述したように、宮内庁本を含む地図屏風は、日本に舶載されてきたオランダ製地図を重要な典拠としている。ところが、世界各地の様々な民族が描かれている宮内庁本であるが、オランダを表す区画は未だに判明していない。同屏風における人物図区画の配列として、左端の扇はアメリカ大陸、東インド諸島の先住民族、右端の扇はヨーロッパ、中東、東アジアの諸民族、という構成が採られている。そして、右端の扇のモデル、典拠が不明な図表において、もしもオランダを表す区画が存在するならば、衣服という観点で最もオランダ人の特徴を備えているのはR-1であると思われる。

しかし、宮内庁本に大部分の人物図を借用されたカエリウス一六〇九年版世界地図を調べた限り、R-1と相似性を有する図像は載せられていない。本地図に唯一オランダと関わりがあるのは、「BELGAE NEERLANDERS（ベルギーネーデルランド人）」と題する画像だけである（図18）。このベルギーのフランデレン地域に生活するオランダ語を話す集団、フラマン人を表す図像について、同じものはW・ブラウ一六〇五年版世界地図にも載せられているため（図19）、後者からの借用であると考えられる。

ただ、図18、19は宮内庁本R-1と比べれば、人物の体勢と衣装が異なってお

図18　BELGAE NEERLANDERS（ベルギーネーデルランド人）」，P．カエリウス一六〇九年版世界地図（W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図）

図19 「BELGAE（ベルギー人）」，W. ブラウ一六〇五年版世界地図に描かれているフラマン人

図20 「HOLLANDI（ホラント人）」，P．カエリウス一六〇七年版ネーデルランド一七州地図

り、特に女性の頭飾りについて、両者の間に大きな差異が存在する。こうした状況を受け、筆者はカエリウスが同時期に出版した他の地図作品を網羅的に調査した。その結果、一六〇七年に出版された地域地図、『ネーデルランド一七州壁掛け地図』の中で、宮内庁本R-1と高い類似性を持つ人物図を発見した（図20）。「HOLLANDI（ホラント人）」と題するこの図像は、人物の姿勢だけではなく、服装の様式もR-1と一致している。そのため、カエリウス一六〇七年版ネーデルランド一七州地図も、宮内庁本の一つの図像的源泉であることは確認できる。以上のことより、宮内庁本において、オランダ人を表す人物図区画はR-1であるということは明らかになった。また、このような材料の選択から、オランダ（ホラント）とフランデレン、そして広義のネーデルランドを区別して捉えるという考え方を、当時の日本人絵師が持っていたことがうかがえる。

また、地域地図を含む複数の資料を典拠とし、様々な要素を組み合わせることによって作られたものもある。宮内庁本R-21において、左側では、頭上に二つの髻を結っており、真珠のネックレス、襟元が広く開いたドレスを身に纏っている女性が描かれている。女性は、白色のハンカチと「フェザーファン（羽根の扇子）」を手にして、顔を斜め前に向け、右側にいる男性と会話しているような姿勢をとっている。しかし、こうした装束の人物は、カエリウス一六〇九年版世界地図に出現していない。それに対して、一六〇六年にW・ブラウによって出版されたイタリア地図では、類似する図像が載せられている。図21は、当該地図から切り取ったもので、もともとは地図の左右両側にそれぞれ配されていた。このような人物図の配置方法は、ホンディウスが一五九〇年代に制作した一連の地域地図がその発端であると考えられている。[10] 例えば、彼の一五九〇年版イングランド地図、一五九〇年版ネーデルラント一七州、一五九一年版フランス地図は、ともに個別の男女人物図を地図両側の装飾的な部分に配列している。先述したW・ブラウ製イタリア地図も、こうした構図の影響を受けたものである。R-21は、図21比べると、人物の体勢に相違はあるものの、ブラウ地図に示されるベネツィア人の典型的な装束と思われる要素を多分に含んだものであると言えよう。そのため、両者には直接的な影響関係があるとは断言できないが、同じ図像源を持つ作品であることは間違いないだろう。

さらに興味を引くのは、R-21の男女二人はともにマスクをつけている点である。宮内庁本の四二区画の中で、マスク姿の人物図はこれが唯一であり、西洋原本の図様を継承・借用することにおける日本絵師たちの選択趣向を

図21　W. ブラウー六〇六年版イタリア地図に描かれるヴェネツィア人男女

図22　服飾書『諸国民の服装』に描かれるパトロンとクルチザンヌ

理解する上で価値あるものであると思われる。筆者の現段階の推測では、こうしたベネツィア人の装束に関する描写表現は、コンメディア・デッラルテ commedia dell'arte というイタリアの即興喜劇に出現する、パンタローネ pantalone とコルティジャーナ cortigiana（高級娼婦）と呼ばれる類型的役柄（ストックキャラクター）のコスチュームから由来するものである。一人は典型的なベネツィア商人、もう一人は当時のベネツィアのファッションを代表する女性で、ほとんど類型化されたこの二つの形象は、コンメディア・デッラルテなど即興喜劇が脚光を浴びることに伴い、その時代に流行していた服飾書の中で頻繁に使用されていた。[1] 例えば、一五九二年に出版された服飾書『諸国民の服装（*Diversarū nationum habitus centum*）』（文化学園図書館所蔵本）には、Magnifico e Cortigiana（図22）と題するイラストがあり、なかのベネツィア人男女は全てマスク着用の姿で描かれ、パンタローネとコルティジャーナの形象を忠実的に反映している。こうした服飾書が初出となるベネツィア人図は、のちにブラウとカエリウスが制作したイタリア地図に借用されたが、しかしいずれにしてもマスクの表現がなかった。さらに、宮内庁本の最も重要な原本とされるカエリウス一六〇九年版世界地図では、ベネツィア人を表す人物図でさえ描かれなかった。このような事情を考えると、マスク姿のベネツィア人という西洋の服飾書に共通する表現が、遠く東方の日本で生まれた屏風に出現することは、実に興味深いことである。

複数の原本から典拠となる図像を能動的に採取し、再創造することは、細部の描写だけではなく、宮内庁本の構図にも重要な特色を付与することになった。一七世紀

図25 「GERMANI(ゲルマン人)」，P．カエリウス一六〇七年版ゲルマニア地図

図 24 「Germanorum Habitus（ゲルマン人の服飾）」，W. ブラウ一六〇九年版ゲルマニア地図

図 23 「GERMANI DUYTSCHEN（ゲルマンドイツ人）」，P．カエリウス一六〇九年版世界地図（W. ブラウ一六〇六 / 〇七版世界地図）

初期、ホンディウスを始め、ブラウ、カエリウスなどの地図製作者は次々と独自の「ゲルマニア地図」を出版した。宮内庁本において、ゲルマニア人を表す図像である R-4 は、カエリウス一六〇九年版世界地図にある「GERMANI DUYTSCHEN（ゲルマンドイツ人）」（図23）を模倣したものであるということは、すでに先行研究によって明らかにされている。この図像に表現上の相似関係があるものは、同時期のブラウ制地域地図（図24）にも見られる。ところで、ここで注目されるのは、図24のブラウ地図より出版時期が早いカエリウス制ゲルマニア地図には、前記三者（宮内庁本 L-4、図23、図24）と相当異なるゲルマン人図（図25）が載せられているということである。この図像は、意外とも言えるが、今までモデル不明とされていた宮内庁本 R-15 と酷似している。左側に立つ女性の服装、片手でドレスを引き上げながら男性と手を繋ぐ体勢、そして羽毛飾りの帽子を被っている髭面の男性、これらの描写は、いずれも R-15 と図25との近似性を示している。これにより、L-4 と R-15 はどちらでもゲルマニア人を表す人物図であることが明らかになり、そして、カエリウス製一六〇七年版ゲルマニア地図も宮内庁本の一つの図像源であることが判明される。

こうした同じ地域を表す人物図が複数回描かれるという現象は、西洋制世界地図にも見られる。例えば、宮内庁本の主な図像源であるカエリウス一六〇九年版世界地図において、グリーンランドとフロリダを表す図はそれぞれ、地図の本体部分（図26）と周縁の装飾的部分（図27）で二回描かれている。しかし、同じ地域の人物図の異なる図像源を使用した L-4 と R-15 とは違い、カエリウス地図における二組のグリーンランド人とフロリダ人図は、人物の姿勢

図 26　P. カエリウス一六〇九年版世界地図の本体部分に描かれるフロリダ人とグリーンランド人

図 27　「FLORIDANI ET GROENLANDI（フロリダ人とグリーンランド人）」，J. ブラウー六四五 / 四六年版世界地図

①宮内庁本　②神戸本　③香雪本　④「スペイン人物図」P. カエリウス一六〇九年版世界地図（W. ブラウー六〇六 / 〇七年版世界地図）

図 28　四種類のスペイン人物図

を改変したものだけであり、基本的に同じ図像の繰り返しとみなすことができる。

最後に、カエリウスやブラウ製地図における人物図以外の西洋図像を典拠とする例を見ておきたい。宮内庁本R-2は、タイトルが付いていないが、神戸本と香雪本の中に類似した図像があるため、スペインを表す人物図であることが分かる。しかし、ここで注目したいのは、宮内庁本の主たる図像源であるカエリウス一六〇九年版世界地図では、同じ主題を扱いながらも前記三者と全く異なる表現で描かれたものがあるということである（図28）。三つの南蛮屏風において、男性像はいずれでも見る人に背中を向けるような構図で表現されている。それに加えて、身体の左に剣を佩いている点も共通している。一方で、カエリウス地図では、服装は男女とも南蛮屏風のそれと一致しているものの、左側に立つ男性は正面像であること、そして剣を装備していないことは、本図は三種類の南蛮屏風におけるスペイン人物図と違う図像源を持っていることを示唆している。

ところが、一六〇八年に出版したホンディウスの世界地図には、南蛮屏風と類似した表現が見受けられる。ホンディウスは、カエリウスの義理の兄であり、ビジネスパートナーでもあった。彼が一五九五年に出版したヨー

図29 「Hispani（スペイン人）」，ホンディウス一六〇八年版世界地図

図30 「SEVILLA（セビリア）」『世界都市図帳』第四巻

ロッパ地図では、周縁の装飾的部分に一男一女の人物図が一六枚配置されており、この種の構図形式の原点となる作品である。この装飾の形式は、のちに地図業界の潮流となり、ブラウやカエリウスもその影響を受け、一男一女の人物図区画を添えた地図を相次いで制作していた。こうした地図業界の流行を作ったホンディウスは、一六〇八年にメルカトル図法で制作された世界地図を上梓した。本地図において、一男一女の組み合わせで描かれた人物図が二三区画設置されており、その中で「Hispani（スペイン人）」（図29）と題する人物図がある。本図は、服飾の表現はもちろん、女性に向かって手を差し出しながら誘っているようなポーズをとる男性が背面像で描かれていることや、片手でハンカチを握っている女性の体勢からも南蛮屏風との近似性が窺われる。ただ、佩剣という特徴的な描写は見受けられておらず、南蛮屏風の直接の図像源とは言い難い。

では、宮内庁本を含む南蛮屏風のスペイン人物図に出現する佩剣の表現は、どのような作品を典拠としていたのだろうか。一つの可能性として挙げられるのは、G・ブラウン Georg Braun が編集し、F・ホーヘンベルフ Franz Hogenberg が刊行した『世界都市図帳（*Civitates Orbis Terrarum*）』である。一五七二年から一六七一年にわたって六巻が刊行された本書には、世界の主要都市の鳥瞰図が収録されている一方で、都市図に対応する人物図も大量に載せられている。その形式としては、一男一女のものから、二男二女の組み合わせや大勢の人が集まっているようなものまで様々であるが、どちらも都市図の一部として描かれている。ここでは、一五八八年出版の第四巻に収められている「セビリア」都市図（図30）の右下に位置する三人

図 31 「INSULANI DE LADRONES INSULAE CAPUL INDIGENA(ラドロネス島とカプール島の原住民)」，J. ブラウー六四五 / 四六年版世界地図

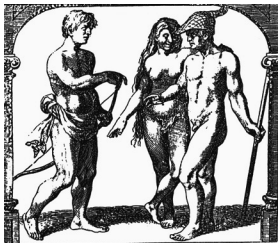


図 32 「INSVLAE CAPVL Incola. D E LADRONES Insulani」(プール島とラドロネス島の原住民)」，W. ブラウー六〇八 / 二四年版アジア地図

図 33 『ボクサー写本（Boxer Codex）』に描かれているビサヤ諸島の男性

に注目したい。その中で、右端にいる男性は、細部の描写は異なるものの、女性に手を出している体勢、左腰に佩いている剣、そして背面像で表現されているという特徴は、いずれも南蛮屏風やホンディウス地図に類似しており、モチーフにおいての共通性が見出される。こうした状況を総合的に考えると、「セビリア」の人物像とホンディウス地図、ならびに南蛮屏風のなかのスペイン人物図との間に、明確な借用関係があるかどうかは断言できないが、西洋地図学的文脈においてのスペイン人物に関しては、少なくともブラウ、カエリウス地図に現れる正面像と、男性人物を反転する背面像という二種類の表現様式があることは間違いないだろう。そして、南蛮屏風の具体的な図像源は未詳ながらも、ホンディウス一六〇八年世界地図と『世界都市図帳』、もしくは両者と関わりのある資料を典拠としている可能性が高いと言えよう。

そのほか、カエリウス地図にない要素を他の作品から採用し、前者と結合することによって新しい人物図を制作するケースもある。今までの研究が言及してこなかった宮内庁本L-16について、左側に位置する女性の体勢、特に頭の振り向き動作はL-19に描かれている女性と類似している。L-19は、カエリウス一六〇九年版世界地図の「INSULANI DE LADRONES INSULAE CAPUL INDIGENA（ラドロネス島とカープル島の原住民）」と題する区画（図31）の左側にいる男女二人から由来するものである。そして、この区画の右側にいる男性は、L-16の男性と同じような服装を着ており、特徴的な弓も一致している。それに加えて、宮内庁本ではL-16とL-19は上下隣接する区画である。そのため、L-16とL-19は複数民族が描かれている図31を二分割したものであることは間違いな

いだろう。

前節で紹介したように、こうした原本における複数民族が描かれている区画を二分割し、類似する女性図を両方に付け加えることは、宮内庁本の絵師たちがよく使用する手法である。しかし、ここで注目すべきは、L-16に見受けられる男女の刺青と男性が付ける金色の耳飾りの描写である。刺青に関して、図31に挙げられたブラウ一六四五／四六年版世界地図にも出現したが、解像度が低いため、同じ形の図像が載せられているブラウ一六〇八年版世界地図やカエリウス一六〇九年版地図において、刺青の描写があるかどうかは確認できない。ところが、出版時期の早いブラウ一六〇八／二四年版アジア地図（図32）では、カープル島人を表す男性図には刺青の表現はなかった。そのため、図31の刺青はのちに追加されたものである可能性は否定できない。また、耳飾りの描写は、上記地図のいずれの中でも見受けられない。それでは、なぜこのような特徴的な表現は、制作時期のより早い宮内庁本に描かれたのだろうか。

カープル島は、フィリピン中部のビサヤ諸島（Visayas）に属している。この地域の風俗に関して、一五九〇年にマニラで著された『ボクサー写本（*Boxer Codex*）』には詳細な記録が残っている。その記録によると、刺青は優雅な人の風習として当地の人々に捉えられ、金製の耳飾りを付けることも非常に普遍的であるという。[12] また、この写本には、一男一女式の人物図が多数収録されており、その中でビサヤ諸島の男女に関する描写では、刺青と耳飾りの要素が確認できる（図33）。そのため、ビサヤ諸島でこうした風習があるということは、一五九〇年代以前にすでに外部—主にフィリピンのヨーロッパ人—に認識されていたと思われる。そして、一六世紀末から一七世紀初期にかけて、日本とフィリピンとの間で行われた頻繁な人的・物的交流と併せて考えると、屏風の絵師たちは『ボクサー写本』、あるいは日本に流入された他のフィリピン情報に触れた可能性がある。つまり、同時代の西洋製地図にない刺青や耳飾りのような細かい描写がL-16に見受けられるのは、後者と全く系統の異なる資料を参照した結果であると判断するのが妥当であろう。

二　南蛮趣味と人物図の変容

前章までは、日本列島からかけ離れた遠隔の諸地域を表す人物図を見てきたが、本章では、宮内庁本に描かれている東アジアの国々の人物図を考察の対象とする。同屏風の主な図像源であるカエリウス一六〇九年版世界地図では、「CHINENSES ET IAPONENSES（中国人と日本人）」（図

図34 「CHINENSES ET IAPONENSES（中国人と日本人）」，J. ブラウー六四五／四六年版世界地図

34）と題する区画がある。しかし、宮内庁本の制作にあたり、日本の絵師たちはこの図像を採用していなかった。その代わり三枚の新しい図像（R-16、R-19、R-20）が作られ、屏風右扇の左下端に設置された。これらの新図像はどのようなものを典拠としたのか、日本絵師が西洋地図の図柄を改変する際に、どのような手法を使用していたのか、また、こうした改変が行われた文化的背景はどのようなものだったのか、などの問題について不明な点が多く残っている。ここでは、宮内庁本と同時代に制作された東アジア諸国の人物を表す他の図像との比較分析を通して、上記の問題を検討してみよう。

1. 西洋人が見た中国人と日本人が見た大明人

ブラウ地図とカエリウス地図に現れる中国人像（図34）に関しては、すでに呉瑞林氏の研究がある。呉氏によると、この図像はリンスホーテンJan Huygen van Linschotenの『東方案内記（*Itinerario*）』（図35）を参考に描いたものであるという。そして、『東方案内記』に載せられている絵図は、当時ヨーロッパ向けに生産された輸出磁器の図柄の影響を受けたものとして、磁器に描き込まれた男女の形象はその図像源である可能性が高いと考えられている[13]。しかし、こうした中国人の形象に対する認識は、必ずしも現実を反映しているとは言えない。例えば、図35の左端に立つ女性は、中国神話に登場する麻姑という仙女の図柄から由来するもので

図35 リンスホーテン著『東方案内記（Itinerario）』に載せられている中国人像
図36 「CHINENSES（中国人）」，ホンディウス一六〇八年版世界地図
図37 「CHINENSES（中国人）」，W. ブラウー六一七年版アジア地図
図38 「CHINENSES（中国人）」，ホンディウス・ジュニアー六一九年版アジア地図

あり、その服飾は当時の中国女性のそれと大いに乖離している。また、左から三人目の男性については、幞頭という冠り物に対する認識がないためか、もともと頭の左右に伸びだす二本の展脚が誤って頭の前後に描かれている。

このような中国人像は、一種の類型的な表現として一七世紀の西洋地図に広く用いられていた。その代表的な作品として、ホンディウス一六〇八年版世界地図（図36）、W・ブラウ一六一七年版アジア地図（図37）、ホンディウス・ジュニア一六一九年版アジア地図（図38）などが挙げられる。これらの地図にある中国人図は、すべて一男一女の形になっており、『東方案内記』の幞頭を着用している男性像と麻姑から由来した女性像を図像源として採用している。一方で、数量的に少ないケースであるが、W・ブラウ一六〇八／二四年版アジア地図（図39）のように、前記一男一女の上で図35の左から二人目の男性像を追加し、二男一女の構図で表現されるものも存在する。結局のところ、地図によって、人物が所持する物品や冠り物の様式、または肩に掛けるものの種類は異なるが、基本的に『東方案内記』のモチーフを継承したものである。

図 39 「CHINENSES（中国人）」，W. ブラウ一六〇八 / 二四年版アジア地図

図 40 『琵琶記』挿画（局部），万暦二五年刊本
図 41 『元曲選』挿画（局部），一六世紀末～一七世紀初
図 42 小田野直武『唐太宗・花鳥山水』（局部）
図 43 司馬江漢『卓文君図』（局部）
図 44 『南蛮屏風』（局部）

ヨーロッパの中国認識とは対照的に、同時代の日本絵画に現れている中国人像の大多数は、より現実に近い描写になっている。宮内庁本 R-16 では、軟脚幞頭と団領服を身につけている男性および、髪髻を結び、上衣下裳形式の服を着用している女性が描かれている。この男女の組み合わせは、明刻本の『琵琶記』（図40）や『元曲選』

（図41）など、中国国内で制作された絵画や版画作品の中でしばしば見られる。この現象は、唐時代から絶えずに続いてきた両国間の多様な人と物の交流を物語っている。

こうした交流を通じて、中国の絵画だけではなく、画譜ないし書籍中の挿画なども海を渡り、各時代の日本画家に多大な影響を与えていた。先述した宮内庁本R-16に登場する男女の形象は、当時の狩野派、ひいては一八世紀後半の秋田派の画作においても、典型的な中国人像として採用されている。その中で最も注目に値するのは、小田野直武の『唐太宗・花鳥山水図』（図42）と司馬江漢の『卓文君図』（図43）である。また、現在大阪城天守閣に所蔵されている宮内庁本と同じ時期に制作された『南蛮屏風』（図44）でも、R-16に類似する軟脚幞頭を被っている男性が見受けられる。

ところが、一見完璧に見えるR-16であるが、男性の幞頭に関して少し変わった表現が一箇所ある。それは、右側と同じように下に垂れるはずの左側の展脚が、頭頂部の位置に描かれた点である。幞頭の形は色々あるが、展脚が下に垂れるのは軟脚幞頭であり、上に揚がる展脚を有する朝天幞頭とは全く異なる物である。宋代の画家・李公麟の『明皇撃球図巻』（図45）に描かれているように、基本的に一つの幞頭には、垂れる脚と揚がる脚が共存することはできないと考えられる。こうした異質の描き方は、先に言及した西洋地図の中の誤った幞頭を被っている中国男性の形象を想起させる。この区画全体を見れば、宮内庁本の絵師たちは、西洋地図における風変わりな中国人像を採用せず、自らの経験、もしくは西洋地図以外の作品を参考にして、実際の姿に近い新たな中国人物図を創作した、ということは明白である。しかし、なぜ幞頭の描写だけは現実から大きく逸脱しているか。そこに、何か作者の意図があるのだろうか。これらの疑問は、下記の一例と併せて考察することによって、その解明の糸口がつかめるだろう。

図45 『明皇撃球図巻』（局部）

2. 朝鮮人か？それとも中国人か？

一六、一七世紀の西洋製地図においては、朝鮮人物に関する描写が欠如していた。それに対して、宮内庁本R-20は朝鮮を表す区画であると先行研究で述べられている。確かに、日本と朝鮮は近隣の国であるゆえ、朝鮮人の服飾や特徴は日本画家にとってある程度馴染みのあるものだろ

う。その上、宮内庁本で新しく制作された三枚の人物図のうち、日本と中国を代表するものは人物の衣装から簡単に確定できる。そのため、残りのR-20は朝鮮人物図であると判断するのは必然のことであると考えてしまう。

しかし、服飾から直接判定できる日本と中国人物図と違い、R-20に描かれる男女の服装は朝鮮王朝時代の典型的な様式と若干異なっている。特段、向かって右側の男性は、綿毛の縁のついた尖った冠り物を着用しており、朝鮮絵画（申潤福「蕙園風俗図」〔図46〕など）だけではなく日本人画家の作品（狩野益信「朝鮮通信使歓待図」〔図47〕など）でも頻繁に登場する黒笠姿の男性形象とは大きな差異がある。そして長袍と履物の描写を見ても、やはり朝鮮王朝時代の服飾特徴と一致していない点が多いと考えられる。

図46　申潤福『蕙園風俗図』（局部）

図47　狩野益信『朝鮮通信使歓待図』（局部）

それでは、こうした特別な「朝鮮人」像を描いた宮内庁本の絵師たちは、どのような資料を手本にしていたのか。ここでまず注目したいのは、R-20における女性の背負い籠と男性の赤い帽子という二つのアイテムである。前者について、その表現は先に述べた麻姑から由来する女性が背負っている籠とよく似ており、唯一異なる点は籠の内容物が二人の嬰児になっていることである。ただ、このような変更は西洋製地図でも多くなされている。『東方案内記』の中国人図（図35）を原本とする図像において、花籠、空の籠、または棒だけを背負っている女性図は何種類も存在している。つまり、西洋の図像では、「籠」というアイテムと「背負う」という体勢は、中国女性を表す代表的なモチーフであると言える。後者について、帽子の形はカエリウス地図の左から二人目の人（図34）、ホンディウス地図の女性（図36）が被っているものと酷似しており、特徴的な赤色も『東方案内記』の左から二人目の男性のものと一致している。そして綿毛の縁が描き添えられたのは、おそらく絵師が男性の額周りの髪を帽子の縁と誤認したからであろう。要するに、R-20に現れる一般的な朝鮮人像と異なる表現は、『東方案内記』をはじめとする西洋図像の中では、中国人図の代表的なモチーフとして用いられているのである。

また、衣服の描写においても類似した状況が確認できる。まず、形だけを見ると朝鮮王朝時代によくあるものと同じような男女の長袍について、ベルト位置の高さを見れば、図46と図47のそれよりは低いが、西洋図像での描き方と類似する。後者との相違点として、女性の襟の部分についている雲肩という飾り物はR-20に見受けられないことが挙げられるが、こうした服装上の特徴は、西洋製地図における日本人図でもしばしば出現するため、中国人や日本人など東アジアの人々を描くときの一種の類型化された表現であったと思われる。東アジアの実情を熟知する日本人絵師たちは、このような現実から乖離している表現を取り除くことも当然あり得るだろう。また、女性が手で何かを握っている点についても、宮内庁本とホンディウス地図をはじめとする西洋地図との類似性が認められる。そして、R-20の男性は、両手を前に突き出し、何かを持っているように見える。このような体勢は、『東方案内記』やフィッセル地図

図48 「CHINENSES（中国人）」，フィッセル一六一四年版世界地図

図49 『万国人物図』（局部）

図50 西川如見『四十二国人物図説』：「朝鮮」

（図48）の棒を所持する赤い帽子の中国男性から由来するものかもしれない。

以上の分析により、宮内庁本R-20に描かれている男女は、背負い籠の内容物や冠り物の縁など細かい表現における変更点があるものの、『東方案内記』や西洋製地図のなかの中国人図と高い相似性を有するため、後者を典拠としたものであると推測される。また、のちに南蛮屏風の影響を受けていた各種の『万国人物図』（図49）や『四十二国人物図説』（図50）においても朝鮮人図があるが、いずれもR-20の描き方を採

用していない。つまり、R-20が表しているのは、必ずしも現実の朝鮮人、もしくは当時の日本人が認識していた朝鮮人とは限らない。このような処理は、日本人絵師の西洋製地図に対する認識不足によるものかもしれないが、もう一つの可能性として、屏風の作者は、西洋製地図での中国人図を保留するため、意図的に二つの中国人図を制作した、ということも考えられるだろう。前章で取り上げた重複のゲルマニア人図は、この推測を裏付けるものといえよう。

3. カールヘアの日本女性と南蛮趣味の流行

日本人の形象は、西洋製地図において主に二種類の図式で表されている。一つはカエリウス一六〇九年版世界地図のように、中国人と共に三人一組の形で出現するもの（図33）で、もう一つは、ブラウ一六〇八年版アジア地図やフィッセル一六一四年版世界地図などに載せられている二人一組の日本人図（図51）である。これらの図像では、西洋からもたらされてきた鉄砲、日本を代表する武具である太刀、そして当時の男性の間に流行していた月代の髪型など、日本の特色を反映した要素が盛り込まれている。しかし、日本女性に関する描写は見当たらない点や、男性はいずれも中国人図と類似する長袍姿で表現されているという点などでは、少し物足りない印象が残ってしまう。

図51 「IAPONES（日本人）」，W. ブラウ一六〇八 / 二四年版アジア地図
図52 『唐船・南蛮船屏風』（局部）
図53 『マリア十五玄義図』（局部）

こうしたヨーロッパ人が制作した日本人図の対照となるのは、宮内庁本R-19である。自国の形象を絵にする際、屏風の絵師たちは西洋製地図での曖昧な描き方を放棄し、より一層現実に近い表現で日本人図を書き直したのである。例えば、長袍の代わりに男性が身につけているのは羽織袴であり、本来腰に佩いている太刀も帯に差す打刀に入れ替わっている。そのほか、女性図も新しく追加された。花模様の小袖と赤い打掛を身に纏っているこの女性には、一つ興味深い特徴がある。それは、カールのかかった髪型である。宮内庁本

とほぼ同時期に制作された『唐船・南蛮船屏風』（図52）では、まっすぐで艶やかな髪を後ろに流す女性の形象が描かれている。このような垂髪の表現は、これまでの日本絵画で主流であった。それに対して宮内庁本のカールヘアは、南蛮美術のなかで西洋女性を表現する要素として頻出している。京都大学総合博物館に所蔵されている『マリア十五玄義図』（図53）に描かれるマリア像はその代表的なものである。

世界各地の人々の相貌や服飾を絵画の形で端的に表現することは、宮内庁本における人物図区画の主たる制作目的である。にもかかわらず、なぜ絵師たちは日本女性を描く際に、西洋女性の特色と思われるカールヘアという描写をあえて採用したのか。このような現象は、日本で一世を風靡していた南蛮趣味と密接に関係していると考えられる。

図54 『男女遊楽図屏風』（局部）

図55 『元和大殉教図』（局部）

一六世紀中頃、ヨーロッパ人との接触が始まることに伴い、相手の服飾や髪型などに対する日本人の好奇心も高まっていった。やがて南蛮趣味と呼ばれる新しい審美的思潮が形成され、社会全体に影響を及ぼしていた。一五九四年に長崎から出されたフランチェスコ・パッシというイエズス会宣教師の書翰中に、「関白殿（秀吉）がポルトガル風の服装をたいへん好みますし、彼の臣下たちもそれにならってしばしばポルトガル風の服装をまといます」という報告がある[14]。服飾のほか、西洋風の髪型も模倣の対象となっていた。喜多川守貞が著した『守貞漫稿』では、江戸時代の縮毛に関する記録が残っている[15]。また、洋風画以外の日本絵画においても、カールヘアの女性が登場し始めた。『男女遊楽図屏風』（図54）や『元和大殉教図』（図55）などでは、いずれもこうした女性像が見受けられる。

上記のように宮内庁本の絵師は、当時における日本人の代表的な服装をつぶさに描き込んだが、その一方で日本女性を表す部分に、カールヘアという南蛮趣味を体現する要素が加えられることによって、この作品の洋風画としての性格がより鮮明になったと言えよう。このような文脈に沿って考えると、先述したR-16およびR-20における変わった描き方も、日本人図の問題と同様に、洋風画として西洋製

原本の要素を最大限に保持するためにされたことであると理解できるだろう。

ジョバンニ・ニコラオ、ならびに彼に西洋絵画の技法を教わったイエズス教画派の日本人絵師たちは、当時ヨーロッパ最先端の地理知識と世界認識を具現化した様々な地図を日本の屏風絵で表現した。西洋の地図では、世界各地に生活する人々の多様な相貌、風俗、または服飾を表すために、多数の人物図が配置されている。これらの図像は、ヨーロッパ人による航海・探検活動の拡大に伴い、数回にわたる更新によって、その描写はますます精緻かつ的確になっていった。これと同様に、西洋製地図を基に制作された屏風絵においても、図像の更新が行われた。その中で、日本人と中国人を表す人物図は最も変化が著しく、原図における間違った表現はほとんど描き直されたが、元の表現を意図的に維持する部分も存在する。こうした興味深い現象から、初期洋風画の作者たちの南蛮趣味に対する追求が窺われるのである。

おわりに

以上、宮内庁本『万国絵図屏風』における四二区画の人物図について、各区画で描かれた人物のモデルと図像的

〔向かって左端の一扇〕　〔中の六扇〕　〔向かって右端の一扇〕

左（L）			世界地図	右（R）		
バンダ	アンボイナ	グリーンランド		ホラント	スペイン	イタリア
1	2	3		1	2	3
マゼラン海峡付近	トゥピ	フロリダ		ゲルマンドイツ	フランス	エジプト
4	5	6		4	5	6
ギニア	ギアナ州	チリ		トルコ	ハンガリー	モスクワ
7	8	9		7	8	9
マラバル	カナリ	ジャワ		ブリタニア	アイルランド	タルタリア
10	11	12		10	11	12
カフレ島	S.ローレンティー島	ブラジル		アラビア	ペルシア	ゲルマニア
13	14	15		13	14	15
カープル島	コンゴ	喜望峰		大明*	スマトラ	ポーランド
16	17	18		16	17	18
ラドロネス島	パタゴニア地方	アビシニア		日本	中国	ベネツィア
19	20	21		19	20	21

〈表 2〉

＊R-16 のタイトルに関しては、同じ中国人を表す R-20 と区別をつけるため、のちに日本で出版された『四十二国人物図説』や各種の「万国人物図」での命名に従い「大明」にした。

源泉を考察してきた。〈表2〉は、三好氏の研究に基づき、さらに本稿での分析結果を取り入れて作成したものである。

宮内庁本の人物図区画は、先行研究の指摘どおりカエリウス一六〇九年版世界地図と密接な関連性を有する一方、ブラウ一六〇六年版イタリア地図、カエリウス一六〇七年版ネーデルランド一七州地図、一六〇七年版ゲルマニア地図、ホンディウス一六〇八年版世界地図など、一七世紀初期に制作されたその他のオランダ製地図も、その図像源として参考にされたと考えられる。また、同時期にヨーロッパ人によって著された書物、例えば『世界都市図帳』や『ボクサー写本』などに描かれた挿画も、同屏風の典拠になった可能性がある。

一六世紀末から端を発した日本とヨーロッパとの接触・交流により、世界各地の多様な民族の相貌や風俗を具現化する人物図は、西洋地図の重要な構成要素として、「王侯騎馬図」、「都市図」などの画題と共に日本画の領域に導入された。その中で、南蛮屏風の代表的な作品として、宮内庁本は最も多くの人物図を有しており、方形の枠に囲まれた区画、人物の背景にある遠い山並みなど、西洋地図の典型的な構図を踏襲している。さらに興味深いことに、縦書きのひらがな表記でタイトルが付けられている香雪本やのちの『万国人物図』とは異なり、宮内庁本の人物図区画は、西洋地図における人物図の下部に設置される横長の長方形の文字枠をそのまま残している。ひらがなは横書きできないために空欄になっているか不明であるが、こうした西洋要素と思われるディテールに対する意図的な保持は、南蛮趣味に影響された初期洋風画の一つの特徴とも言えよう。

ところが、このような特徴は一七世紀になると、次第にローカライズされていった。一六四五年、日本最初の刻本地図屏風『世界地図・万国人物図』が出版され、この作品は表題通り、地図と人物図のみが残っているが、「王侯騎馬図」や「都市図」などは描かれなかった。また、前章で述べた東アジア三国の人物に対する描写がより写実的になり、「長人」、「小人」など想像上の民族も付加されている。さらに、この作品をはじめ、のちに制作された同系統の人物図においては、南蛮屏風に用いられた西洋絵画の技法が東洋的な鉤勒、渲染に変更され、背景としての遠い山並みの表現も用いられなくなった。こうして、世界各地の民族を描く人物図は屏風に止まらず、書籍、巻物ないし双六盤など、多種多様な形で表現され、近世を通じて日本を風靡していたのである。

使用画像一覧表

	作品名	作者	時代	所蔵館	図版出典
図 1	『万国絵図屏風』		一七世紀初	宮内庁三ノ丸尚蔵館	武田恒夫、坂本満編『日本屏風絵集成（第 15 巻）風俗画：南蛮風俗』、講談社、一九七九年
図 2	「HABITU CIVIUM ORBIS CAYRO（カイロ市民の服飾）」，W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図	W.Blaeu	一六〇六 / 〇七年	原本逸失	Günter Schilder, *Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence*
図 3	「POLONI POLEN（ポーランド人）」，W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図	W.Blaeu	一六〇六 / 〇七年	原本逸失	Günter Schilder, *Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence*
図 4	「POLONI（ポーランド人）」，クラース・ヤンス・フィッセル一六一四年版世界地図	Claes Jansz Visscher	一六一四年版	バーデン州立図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (III)*
図 5	「CAFRES ET INSULAE S. LAURENTII INCOLAE（カフレと S. ローレンティー島の住人）」，ホンディウス一六二四年版世界地図（W. ブラウ一六〇五年版世界地図）	Jodocus Hondius Junior	一六二四年	フランス国立図書館所蔵	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (III)*
図 6	「PROMONTORII BONAE SPEI ET CONGO POPULI（喜望峰とコンゴの民）」，ホンディウス一六二四年版世界地図（W. ブラウ一六〇五年版世界地図）	Jodocus Hondius Junior	一六二四年	フランス国立図書館所蔵	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (III)*
図 7	「MAGELLANICI FRETI ACCOLAE（マゼラン海峡の近くに住む人）」，J. ブラウ一六四五 / 四六年版世界地図	J.Blaeu	一六四五 / 四六年	ロッテルダム海洋博物館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (III)*
図 8	「FRETI MAGALLANICI ACCOLAE（マゼラン海峡の近くに住む人）」，W. ブラウ一六〇八 / 二八年版アメリカ大陸地図	W.Blaeu	一六〇八 / 二六年	アンナ・アマーリア大公妃図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (V)*
図 9	「ICONES PATAGONVM, ad Fretum Magall（マゼラン海峡の近くのパタゴニア人の画像）」，W. ブラウ一六〇八 / 二八年版アメリカ大陸地図	W.Blaeu	一六〇八 / 二六年	アンナ・アマーリア大公妃図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (V)*
図 10	「ARABES ET TURCA」（アラブ人とトルコ人），W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図	W.Blaeu	一六〇六 / 〇七年	原本逸失	Günter Schilder, *Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence*
図 11	「ARABES」（アラブ人），ホンディウス一六〇八年版世界地図	Jodocus Hondius	一六〇八年	オーストラリア国立図書館	
図 12	「BANDAE ET MOLUCCARUM INCOLAE/IAVANI」（バンダとモルッカの住人/ジャワ人），W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図	W.Blaeu	一六〇六 / 〇七年	原本逸失	Günter Schilder, *Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence*
図 13	「第二次東インド諸島航海図」Overview map with the route taken by the second Voyage（1598-1600）to the East Indies（局部）	Cornelis Claesz	一六〇〇年版	ロッテルダム海洋博物館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (VII)*
図 14	P. カエリウス一六〇九年版世界地図（局部）	P.Kaerius	一六〇九年	フランス国立図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (VIII)*
図 15	「たるたありやの人」，『レパント戦闘図・世界地図屏風』		一七世紀初	香雪美術館	香雪美術館特別展『交流の軌跡：初期洋風画から輸出漆器まで』図録、二〇一九年
図 16	「CHILENSES（チリ人）」，ホンディウス一六〇八年版世界地図	Jodocus Hondius	一六〇八年	オーストラリア国立図書館	
図 17	「PERCICUS（ペルシア人）」，ホンディウス一六〇八年版世界地図	Jodocus Hondius	一六〇八年	オーストラリア国立図書館	

図 18	BELGAE NEERLANDERS（ベルギーネーデルランド人）」，P. カエリウス一六〇九年版世界地図（W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図）	W.Blaeu	一六〇六 / 〇七年	原本逸失	Günter Schilder, *Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence*
図 19	「BELGAE（ベルギー人）」，W. ブラウ一六〇五年版世界地図に描かれているフラマン人	W.Blaeu	一六〇五年（一六二四年版）	フランス国立図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (VIII)*
図 20	「HOLLANDI（ホラント人）」，P. カエリウス一六〇七年版ネーデルランド一七州地図	P .Kaerius	一六〇七年	Tomasz Niewodniczański 個人蔵	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (VIII)*
図 21	W. ブラウ一六〇六年版イタリア地図に描かれるヴェネツィア人男女	W.Blaeu	一六〇六年	Tomasz Niewodniczański 個人蔵	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (IV)*
図 22	服飾書『諸国民の服装』に描かれるパトロンとクルチザンヌ	P.Bertelli	一五九二年	文化学園図書館	
図 23	「GERMANI DUYTSCHEN（ゲルマンドイツ人）」，P. カエリウス一六〇九年版世界地図（W. ブラウ一六〇六 / 〇七版世界地図）	W.Blaeu	一六〇六 / 〇七年	原本逸失	Günter Schilder, *Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence*
図 24	「Germanorum Habitus（ゲルマン人の服飾）」，W. ブラウ一六〇九年版ゲルマニア地図	W.Blaeu	一六〇九年	原本逸失	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (IV)*
図 25	「GERMANI（ゲルマン人）」，P. カエリウス一六〇七年版ゲルマニア地図	P .Kaerius	一六〇七年	ライデン大学図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (VIII)*
図 26	P. カエリウス一六〇九年版世界地図の本体部分に描かれるフロリダ人とグリーンランド人	P .Kaerius	一六〇九年	フランス国立図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (VIII)*
図 27	「FLORIDANI ET GROENLANDI（フロリダ人とグリーンランド人）」，J. ブラウ一六四五 / 四六年版世界地図	J.Blaeu	一六四五 / 四六年	ロッテルダム海洋博物館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (III)*
図 28	①「スペイン人物図」宮内庁本		一七世紀初	宮内庁三ノ丸尚蔵館	
	②「スペイン人物図」神戸本		一七世紀初	神戸市立美術館	
	③「スペイン人物図」香雪本		一七世紀初	香雪美術館	
	④「スペイン人物図」P. カエリウス一六〇九年版世界地図（W. ブラウ一六〇六 / 〇七年版世界地図）	W.Blaeu	一六〇六 / 〇七年	原本逸失	Günter Schilder, *Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence*
図 29	「Hispani（スペイン人）」，ホンディウス一六〇八年版世界地図	Jodocus Hondius	一六〇八年	オーストラリア国立図書館	
図 30	「SEVILLA（セビリア）」『世界都市図帳』第四巻	Georg Braun, Franz Hogenberg	一五八八年		
図 31	「INSULANI DE LADRONES INSULAE CAPUL INDIGENA（ラドロネス島とカプール島の原住民）」，J. ブラウ一六四五 / 四六年版世界地図	J.Blaeu	一六四五 / 四六年	ロッテルダム海洋博物館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (III)*
図 32	「INSVLAE CAPVL Incola. DE LADRONES Insulani」（プール島とラドロネス島の原住民）」，W. ブラウ一六〇八 / 二四年版アジア地図	W.Blaeu	一六〇八 / 二四年	アンナ・アマーリア大公妃図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (V)*
図 33	『ボクサー写本（Boxer Codex）』に描かれているビサヤ諸島の男性		一五九〇年以前	インディアナ大学リリー図書館	

図 34	「CHINENSES ET IAPONENSES（中国人と日本人）」，J. ブラウ一六四五 / 四六年版世界地図	J.Blaeu	一六四五 / 四六年	ロッテルダム海洋博物館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (III)*
図 35	リンスホーテン著『東方案内記（Itinerario）』に載せられている中国人像	Jan Huyghen van Linschoten	一五九六年		
図 36	「CHINENSES（中国人）」，ホンディウス一六〇八年版世界地図	Jodocus Hondius	一六〇八年	オーストラリア国立図書館	
図 37	「CHINENSES（中国人）」，W. ブラウ一六一七年版アジア地図	W.Blaeu	一六一七年	ライデン博物館（Museum Boerhaave, Leiden）	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (VI)*
図 38	「CHINENSES（中国人）」，ホンディウス・ジュニア一六一九年版アジア地図	Jodocus Hondius Junior	一六一九年	個人蔵 formerly Stopp Collection	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (VI)*
図 39	「CHINENSES（中国人）」，W. ブラウ一六〇八 / 二四年版アジア地図	W.Blaeu	一六〇八 / 二四年	アンナ・アマーリア大公妃図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (V)*
図 40	『琵琶記』挿画（局部）		一五九七年		万暦二十五年汪光華玩虎軒刊本
図 41	『元曲選』挿画（局部）		一六世紀末～一七世紀初		『中国古代版画叢刊二編』上海古籍出版社、一九九四年
図 42	『唐太宗・花鳥山水』（局部）	小田野直武	一八世紀	秋田県立近代美術館	
図 43	『卓文君図』（局部）	司馬江漢	一八世紀	帰空庵コレクション	
図 44	『南蛮屏風』（局部）		一六世紀末	大阪城天守閣	
図 45	『明皇撃球図巻』（局部）	作者不詳（一説：李公麟）	宋時代	遼寧省博物館	
図 46	『蕙園風俗図』（局部）	申潤福	一八世紀末	澗松美術館	
図 47	『朝鮮通信使歓待図』(局部)	狩野益信	一七世紀	泉涌寺	
図 48	「CHINENSES（中国人）」，フィッセル一六一四年版世界地図	Claes Jansz Visscher	一六一四年	バーデン州立図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (III)*
図 49	『万国人物図』（局部）		一六四五年	神戸市立博物館	
図 50	『四十二国人物図説』：「朝鮮」	西川如見	一七二〇年	早稲田大学図書館	
図 51	「IAPONES（日本人）」，W. ブラウ一六〇八 / 二四年版アジア地図	W.Blaeu	一六〇八 / 二四年	アンナ・アマーリア大公妃図書館	Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica (V)*
図 52	『唐船・南蛮船屏風』（局部）		一七世紀	九州国立博物館	
図 53	『マリア十五玄義図』(局部)		一七世紀初	京都大学総合博物館	
図 54	『男女遊楽図屏風』（局部）		江戸時代前期	細見美術館	
図 55	『元和大殉教図』（局部）		一六～一七世紀	ローマ　イル・ジェス一聖堂	坂本満ほか著『原色日本の美術〈25〉：南蛮美術と洋風画』、小学館、一九七〇年

註

（1）屏風の製作時代に関する論考は、Gu¨nter Schilder, “Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence.” *Imago Mundi*, Vol. 31, 1979, pp. 36-54、勝盛典子「『レパント戦闘図世界地図屏風』と司馬江漢筆『異国風物図絵屏風』：船載銅版画を典拠とする二つの作品をめぐって」（中之島香雪美術館編『交流の軌跡：初期洋風画から輸出漆器まで』、二〇一九年）が挙げられる。

（2）Joseph F. Loh, *When Worlds Collide—Art, Cartography, and Japanese Nanban World Map Screens*, Columbia University PhD Dissertation, 2013, p. 26.

（3）三好唯義「P・カエリウス一六〇九年版世界地図をめぐって」（『神戸市立博物館研究紀要』第一三号、一九九七年）、第二五頁。

（4）前掲注1勝盛典子論文、第七頁。

（5）宮内庁本をはじめとする日本製屏風は、四二区画の人物図を有しているが、P・カエリウス一六〇九年版世界地図、並びにその原本となるW・ブラウ一六〇七年版世界地図においては、いずれも三〇区画しか描かれていない。

（6）前掲注3三好論文、第一六頁。

（7）前掲注1 Schilder論考、第三六頁。

（8）「はじめに」で述べたように、P・カエリウス一六〇九年版世界地図はW・ブラウ一六〇七年版世界地図の改訂版であり、前者に描かれている人物図区画は後者のそれをそのまま転用したものであると考えられている。そのため、P・カエリウス一六〇九年版世界地図、W・ブラウ一六〇七年版世界地図、そして後に刊行されたJ・ブラウ一六四五／四六年版世界地図にある人物図区画は、すべて同じものなのである。

（9）クラース・ヤンス・フィッセルはブラウ一六〇五年版世界地図における人物図の板面の制作者である。この板面は、後に出版されたブラウ一六〇六／〇七年版世界地図、カエリウス一六〇九年版世界地図の参考となり、そしてフィッセル自身が刊行した世界地図においても、三〇枚の原図のうち二九枚がそのまま転用されている。（Günter Schilder, *Monumenta Cartographica Neerlandica Vol.III*, Uitgevermaatschappij Canaletto, p. 161を参照）

（10）前掲注1 Schilder論考、第五六頁。

（11）Elizabeth Hill Boone, “Seeking Indianness: Christoph Weiditz, the Aztecs, and feathered Amerindians”, *Colonial Latin American Review*, 26:1, (2017), p. 40を参考。

（12）George Bryan Souza; Jeffrey Scott Turley, *The Boxer Codex: transcription and translation of an illustrated late sixteenth-century Spanish manuscript concerning the geography, ethnography and history of the Pacific, South-East Asia and East Asia*, Leiden: Brill, 2016, pp. 334-335.

（13）呉瑞林『載籍載図：大航海時代的中国図像研究』（中央美術学院博士学位論文、二〇一九年）を参照。

（14）岡本良知『日本の美術　第十九巻　南蛮美術』（平凡社、一九六五年）第七六頁より引用。

（15）鈴木昌子「日本における縮毛：近世初期風俗画にみる美意

宮内庁蔵『万国絵図屏風』人物図考（李）

識」（『山野研究紀要』第九巻、二〇〇一年）一三～三〇頁を参照。

（著者：広州美術学院助理研究員、
中央美術学院博士課程修了
訳者：本学博士課程後期課程）